

上ノ山館跡

第2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第175集



2009

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





うえ の やま たて あと
上ノ山館跡
第2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第175集

平成 21 年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター







序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、上ノ山館跡の調査成果をまとめたものです。

上ノ山館跡は、山形県の南東に位置する上山市にあります。上山市は村山地方の最南端に当たりますが、上ノ山館跡は南西端の上山盆地と米沢盆地の間にある山間の細長い盆地に面しています。この付近は山形方面と米沢方面とを結ぶ交通の要衝となっており、現在は国道13号とJR奥羽本線が併走しています。かつては東置賜郡中川村に含まれ、置賜と村山の郡境となっていました。

この度、一般国道13号上山バイパス改築事業にかかわり、上ノ山館跡の調査を実施しました。上ノ山館跡は自然の丘陵を利用して構築された中世の館跡で、丘陵の西側に階段状の帶曲輪が検出され、隣接する中山城跡を防備するための前線基地であったことが明らかになり、多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この先祖から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の歴史に学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護思想の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成21年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 山口常夫



凡　例

- 1 本書は一般国道13号上山バイパス改築事業に係る「上ノ山館跡第2次調査」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本書の執筆は小林圭一が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、佐東秀行、安部実、長橋至、伊藤邦弘、黒坂雅人が監修した。
- 4 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。
- 5 遺構図の縮尺、網点の用法は各図に示した。

調　査　要　項

遺　跡　名 上ノ山館跡
遺　跡　番　号 207-002 (山形県教委1996)
所　在　地 山形県上山市大字中山字上ノ山
調　査　委　託　者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調　査　受　託　者 財団法人山形県埋蔵文化財センター
受　託　期　間 平成19年9月1日～平成21年3月31日
現　地　調　査 平成19年9月18日～平成19年10月19日
調　査　担　当 平成19年度　調　査　課　長　長橋至
 専門調査研究員　伊藤邦弘
 調　査　研　究　員　須藤孝宏(調査主任)
 平成20年度　調　査　課　長　長橋至
 課　長　補　佐　伊藤邦弘
 主任調査研究員　小林圭一(調査主任)
調　査　指　導 山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室 (平成19年度)
 山形県教育庁文化遺産課 (平成20年度)
調　査　協　力 上山市教育委員会
 山形県教育庁村山教育事務所
委　託　業　務 地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務 株式会社ワクニ



目 次

I 調査の概要

1	調査に至る経過	1
2	遺跡の位置と環境	
A	地理的環境	1
B	歴史的環境	4
3	調査の経緯と概要	
A	調査区の配置	9
B	グリッドの設定	12
C	調査の経過	12
II	調査の成果	13
III	調査の総括	22
参考文献		22

報告書抄録 卷末

表

第1表 上ノ山船跡周辺の遺跡 6

図 版

第1図	調査概要図	2	第7図	上ノ山船跡現況図	15
第2図	上ノ山遺跡周辺及び木沢盆地地形分類図	3	第8図	A-A'ライン断面図	17
第3図	上ノ山船跡周辺の遺跡	5	第9図	B-B'ライン断面図	17
第4図	上ノ山船跡周辺地形分類図	8	第10図	グリッド配置図	19
第5図	上ノ山船跡周辺表層地質図	10	第11図	上ノ山船跡縄張り図	21
第6図	表層地質図凡例	11			

写 真 図 版

写真図版1 調査区及び周辺の航空写真

写真図版3 調査区全景

写真図版2 調査区全景





I 調査の概要

1 調査に至る経過

山形県内の内陸部を縱走する国道13号は、県内交通網の大動脈としての役割を担っている。しかし上山市と南陽市を結ぶ区間の平地は、山間の細長い地形をなしていることから迂回路がなく、慢性的な交通障害が生じていた。そこで上山市と南陽市を結ぶ区間のバイパス改築事業（上山バイパス）が計画された。

事業の計画を受けて、山形県教育委員会では予定路線について埋蔵文化財の有無を確認する遺跡詳細分布調査を行うと共に、埋蔵文化財の取り扱いについて、関係機関と遺跡の保存について慎重な協議を重ねた。その結果事業計画の変更は困難であり、やむを得ず記録保存することで協議が整い、2004年に山形県教育委員会による試掘調査が実施され（山形県教委2006）、その成果に基づき財団法人山形県埋蔵文化財センターが国土交通省の委託を受けて、2005年5月17日～11月4日に10,000m²の範囲で発掘調査（第1次調査）を実施した（山形県理文2007）。その後工事の進捗に伴い、前回調査区の北西側の追加調査の必要が生じたため、測量調査を主とした第2次調査を実施することになった。

上ノ山館跡は、山形県教育委員会が実施した中世城館跡調査の結果、1995年度に中世の城館跡として周知の遺跡に登録された（山形県教委1996）。遺跡の南端の横川を挟んだ南には、戦国期の城郭である中山城跡⁹が位置しており、中山城を主城にしてその前衛の要塞として上ノ山館跡が構築されたと考えられる。これまでの2回の調査で階段状の帶曲輪を多数検出したが、自然の丘陵を削って成形され、狭小な段が幾重にも巡らされており、中山城跡を防備するための支館としての役割を確認することができた。

なお、上ノ山館跡は「上ノ山櫓跡」と記される場合も多いが、第1次調査では山形県教育委員会からの指導により、「山形県中世城館遺跡調査報告書 第2集（村山地域）」（山形県教委1996）の「市町村別城館遺跡一覧表」にならって「上ノ山館跡」に統一した。

2 遺跡の位置と環境

A 地理的環境

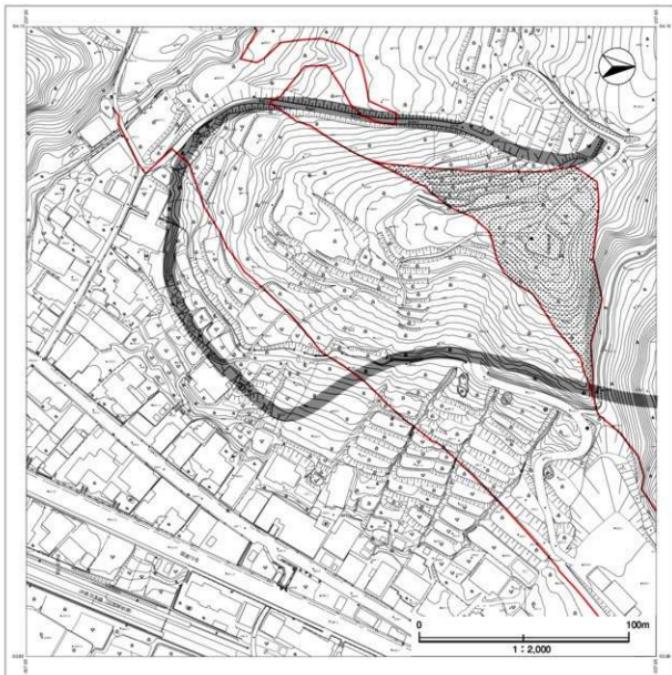
上ノ山館跡は、上山市大字中山字上ノ山に位置している。中山地区は上山市の南西端、上山盆地と米沢盆地の間にある山間の細長い平地（中山盆地）に当たる。山形方面と米沢方面とを結ぶ交通の要衝で、現在は国道13号と奥羽本線が併走しており、かつては東置賜郡中川村に含まれ、置賜と村山の都境となっていた。しかし水系では、山形盆地で最上川と合流する須川の水系に属しており、分水界が境界とならない特異な地域となっている。

中山盆地は、川棚盆地（川棚低地）に源を発し北流する前川に沿って形成された、東西0.3～1.5km、南北約4kmの狭小な盆地である。北端は上山盆地の西南端から西に2km入った山間低地（川口地区）を経て南方に屈折した鉄砲郡（掛入石）に当たり、南端は更に北西方向に屈折する岩部山付近までの範囲にある。低地部は標高240～265mの範囲にあり、その周囲は標高500～700mの中起伏山地で囲まれるが、東側が奥羽山系、西側が白鷹山系となっており、本低地を挟んで両山系が分かたれている。支流は前川に向かってほぼ直交するように東西方向から合流しており、山脚下には崩壊堆積物による緩斜面が発達し、開析された高位段丘や丘陵が島状・舌状に残され、起伏に富んだ地形となっている。

上ノ山館跡は、白鷹山系片倉山の山麓が北から南に突き出た半島状の丘陵に構築されており、遺跡の標高は260～295mを測る。北端をかれい沢、南端を横川で画されており、丘陵頂部（標高295m）には、現在黄金神社が移築されている。遺跡付近の山地の表層地質は、火山性岩石（酸性軽石凝灰岩、泥岩及び凝灰質泥岩）の岩相からなり立っており、地すべり地帯（第三系の地すべり）となっている。調査区内にも土砂崩落の痕跡が観察され、地すべりが頻發した地域であり、調査区中央東側に地割れが認められたことから、該域は発掘調査区域から除外した。



I 調査の概要

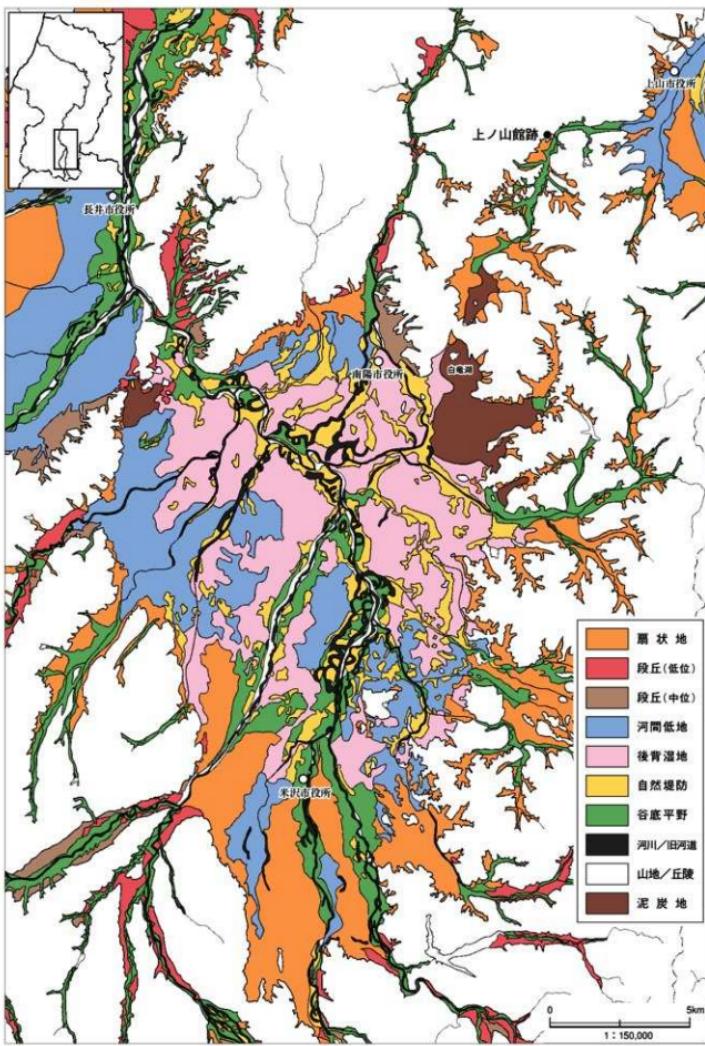


第1図 調査概要図

中山地区の白鷹山系の山裾には、亜炭層（中山層）が形成されている。同地区では近年まで亜炭の採掘が行われており、家庭燃料として利用されていた。上ノ山館跡付近のバイパス造成の工事現場でも、切り取り面に亜炭の堆積層の露頭が確認され、漏水層となっていた。その形成年代は特定されていない（阿子島・米地ほか1983）が、新第三紀鮮新統に属する地層と考えられる。

遺跡の北東には、掛入石が存している。掛入石は「かけりいし」・「かけいりいし」とも呼ばれ、中山地区北端の置賜郡と村山郡の境界にある安山岩質の巨石（第5図）で、巨石に生える1本の桜は西の枝は置賜側、東の枝は村山側とその美を競ったと伝えられている。また岩の中

I 調査の概要



第2図 上ノ山道路周辺及び米沢盆地地形分類図



I 調査の概要

ササ、ヤマツツジ、ヌルデ、オオバクロモジ、ヤマウルシ、レンゲツツジ、タラノキ等の低木、またアキノキリソウ、スイカズラ、アカネ、ノコンギク等の草本が点在する林分であったと考えられる。特に沢筋にはミズキ、クマノミズキ、ケヤキ等の高木林が発達したと考えられるが、現在それ等の大部分は伐採され、スギが植林されている（伊藤ほか2003）。

地質調査が不十分な中山盆地に対し、南接する川棚盆地については詳細な調査が実施されている（中山・宮城1984）。川棚盆地は南北約3km、東西約1.5kmで、東が膨らんだ長円形を呈しており、低地部の標高は274~290mを測る。周囲を標高500~700mの中起伏山地で囲まれ、山脚には緩斜面が発達している（第4図）。盆地の中央には泥炭層が厚く堆積しており（最大層厚は不明）、河川の氾濫に起因する砂礫や水の供給が殆どなく、長期間にわたる泥炭がより良好な状態で残されている。この泥炭層について深さ16mに及ぶ約12万年間の堆積物のボーリング調査が実施され、花粉化石の出現傾向の変化から9つの花粉帯に区分されており、東北地方のウルム氷期以降の植生変遷の基準に位置付けられている（守田・日比野1994）。この内大きな気候変化に伴って花粉化石の出方が変化したと考えられるのは5花粉帯で、堆積層からはA T火山灰（約25,000年前）や、鳴子一柳沢火山灰（約45,000年前）、能代火山灰（約80,000年前）が検出されており、相互対比の指標となっている。

川棚盆地のTS-I帯に当たる約120,000年前より古い時期には、マツ属、ツガ属、シラカバ属の花粉が多く見られ、温帶性針葉樹林が広がっていたと考えられる。

120,000年前頃のTS-IIa帯になると、ブナ、コナラ、ミズナラ、アカシデ、イヌシデ等の冷温帶性落葉樹林が広がっており、前時代よりも涼涼となるが現在の気候に近かったと考えられる。約110,000年前頃のTS-IIb帯になると冷温帶性落葉広葉樹は急速に少くなり、温帶性針葉であるスギが優勢となる。スギの分布に大きな影響を与えるのは降水量と見込まれることから、季節による降水の偏りが想定される。

約90,000年前頃のTS-III帯になると、スギが減少しマツ属、ツガ属、トウヒ属の針葉樹林が目立つようになり、涼涼化の兆候が認められる。

80,000年前頃に始まるTS-IVa帯になると、スギが

ほぼ消滅し、針葉樹のマツ属、ツガ属、トウヒ属、モミ属と落葉樹のシラカバ属等の亜寒帯性针葉樹林で占められるようになり、ウルム氷期の中でも主冰期の初期の寒冷期に相当する。65,000年前頃のTS-IVb帯になると、コナラ属、ニレ属-ケヤキ属、ブナ属等の冷温帶性落葉樹が僅かであるが見られるようになり、前時代よりもやや温暖・湿润になったと考えられる。30,000~10,000年前頃のTS-IVc帯になると、再び冷温帶性落葉広葉樹が見られなくなり、シラカバ属のほか、マツ属、ツガ属、トウヒ属、モミ属の亜寒帯性针葉樹が多くなり、終わり頃にはカラマツ属が現れる。ウルム氷期でも最も寒冷な時期に相当し、気温が現在よりも7~8℃低かったと想定されている。

TS-V帯は深さ130~0mまで、約10,000年前~現在までの期間で、深さ130~60cm、約10,000~2,500年前のTS-Va帯と、深さ60~0cm、2,500年前から現在までのTS-Vb帯に二分される。TS-Va帯では针葉樹が殆ど見られなくなり、ハンノキ属、コナラ属、ブナ属、クマシデ属等の落葉樹が多く見られ、TS-Vb帯では、これ等にマツ属とスギ属が加わる。

以上川棚盆地の花粉分析の成果から、120,000年前以降現在まで、(1)温帶性针葉樹林時代→(2)冷温帶性落葉広葉樹林時代→(3)スギを主とする温帶性针葉樹林時代→(4)温帶性针葉樹と亜寒帯性针葉樹の混交林時代→(5)亜寒帯性针葉樹林時代→(6)亜寒帯性针葉樹と冷温帶性落葉広葉樹の混交林時代→(7)亜寒帯性针葉樹林時代→(8)冷温帶性落葉広葉樹林時代の順序で変遷してきたことが指摘されている（守田・日比野1994）。

B 歴史的環境

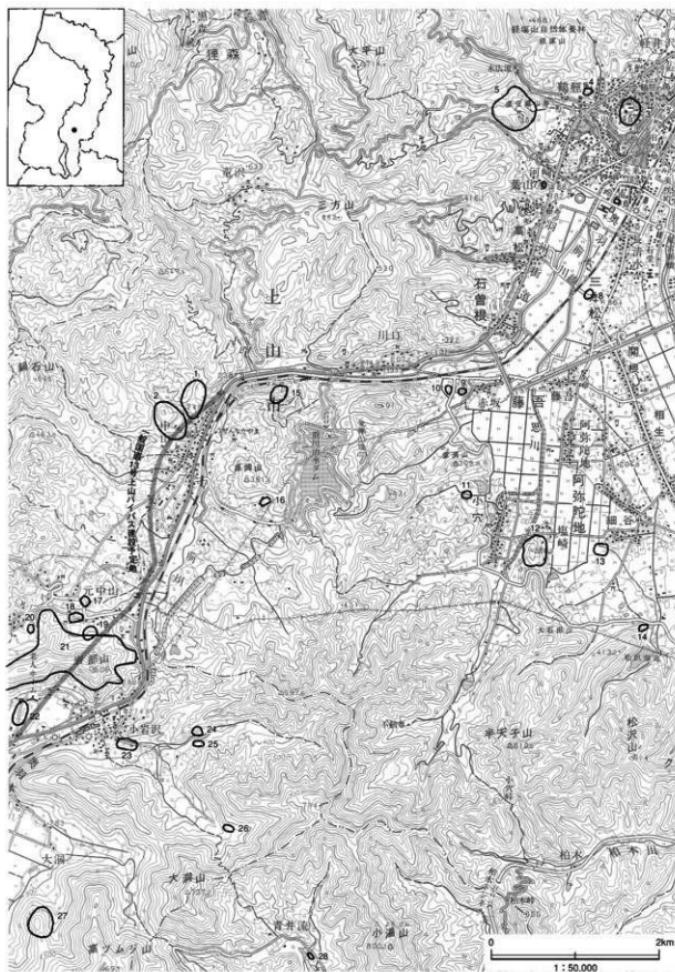
上ノ山館跡（第3図1）が位置する中山地区は、山形方面と米沢方面とを結ぶ要衝の地に当たり、かつては東置賜郡中川村に含まれていたが、1955年の赤湯町との合併を経て、1957年に大字中山が分町して上山市に合併された。同地区は置賜と村山の郡境となっており、江戸時代には米沢街道の宿駅で、人馬難立の問屋や旅籠屋が並んでおり、藩境の境目番所として上ノ山館跡の直下に中山御番所が設置されていた。

米沢街道（最上街道ともいう）は、米沢を起点として





I 調査の概要



第3図 上ノ山駅跡周辺の遺跡（国土地理院発行 1：50,000地形図「赤湯・上山」）



I 調査の概要

第1表 上ノ山館跡周辺の遺跡

遺跡名	市町村	時代	種別
1 上ノ山館跡	上山市 戰国		要塞
2 中山城跡	上山市 戰国		城跡
3 月岡城跡	上山市 天文4年		館
4 松山道跡	上山市 平安		集落跡
5 高橋城跡	上山市 南北朝期		館
6 長清水道跡	上山市 繩文		集落跡
7 豊山室跡	上山市 平安		古窑跡
8 悪い川道跡	上山市 繩文・平安		集落跡
9 上ノ江2道跡	上山市 繩文		散布地
10 上ノ代1道跡	上山市 繩文(早期末)		集落跡
11 潟御寺遺跡	上山市 繩文(後期)		集落跡
12 陣山城跡	上山市 戰国		城館跡
13 磯谷船通跡	上山市 戰国		船
14 松沢道跡	上山市 繩文		集落跡

鞍野目・大橋・赤湯・川越・小岩沢・中山と北へ伸び、掛入石がある領境から最上領に入り、川口宿を通り、上山宿手前の三本松の道分で羽州街道に接続する脇街道で、米沢から最上領への最も近距離の道として重要であった。米沢から赤湯までは、米沢盆地の中央部を通る平坦な街道であるが、赤湯・川越間の島上坂は難所であり、川越からは前川に沿った一条の道のみで、小岩沢・元中山そして中山までは約七里（約28km）の道程で、中山付近の五十町（約5.5km）は馬も叶わぬ険路であったという。

上ノ山館跡に南接する中山城跡（第3図2）は、標高343.9mの天守山の山頂に築かれた戦国期の山城で、家中屋敷を挟んで山城の部分と、標高282.5mの独立丘陵である前森山の部分から成り立っている。天守山は西側に櫓³⁵、東側に横川、北側には深い谷が切り込んでおり、三方を天然の渓谷に囲まれている。中核には本曲輪・二の曲輪・三の曲輪が良好な状態で残されている。主郭である本曲輪は、南北51m、東西38mで格円形を呈しており、その周間に土塁が築かれている。ほぼ東北隅に当たる部分に正方形からなる石積みからなる物見台（天守台）が設けられている。二の曲輪は本曲輪よりも4.9m低い位置に造作され、縦83m、横49mで、中山城内では最大規模の曲輪である。三の曲輪は二の曲輪よりも17.9m低い位置に構築され、東西53m、南北40mで、長方形に近い形状を持つ。北側には本曲輪と同様に土塁が築かれており、その高さは2～2.5m、幅は2～8mを測る。

前森山は南北175m、東西72mの格円形を呈した独立丘陵で、平地との北高差は約20mを測る。山頂部北側を平坦にしたのが主曲輪で、南北130m、東西13m、その南

遺跡名	市町村	時代	種別
15 物見山城跡	上山市 戰国		城壁
16 天守園遺跡	上山市 繩文		集落跡
17 潟御原B道跡	南陽市 繩文（後期）		散布地
18 潟御原C道跡	南陽市 繩文（前・中期）		集落跡
19 潟御原A道跡	南陽市 繩文（後期）		集落跡
20 元や山日影道跡	南陽市 繩文（中期）		散布地
21 岩山道跡	南陽市 鎧		
22 岩谷愛頬跡	南陽市 繩文		集落跡
23 小引沢道跡	南陽市 繩文（前・中期）		集落跡
24 日向道跡	南陽市 繩文（中期）		散布地
25 長治郎道跡	南陽市 繩文（後期）		散布地
26 一ノ倉道跡	南陽市 繩文		散布地
27 大洞道跡	南陽市 鎧		
28 青井流道跡	南陽市 繩文		

東側には長さ120m、幅10mの細長い帯曲輪が平行して構築されており、更にその周間に狭い帯曲輪が幾重にも巡らされている。山城を防備するための施設であったと考えられるが、中山城構築以前の橋と見なす見解も提出されている（伊藤ほか2003）。なお家中屋敷の部分は上杉領になってからの配置跡で、2005～06年山形県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施されている。

上ノ山館跡の東方に位置する物見山城跡（第3図15）は、標高359.8mの奥羽山系の小起伏山地に、永禄・元亀年間（1558～1572年）頃中山城主であった中山弥太郎によって最上領を三方に見渡す自然の要害の地に、物見台と烽火台の性格をもつて構築されたものと言われている。山頂はほぼ平坦な三角形の地で、南北22.5m、東西12.5mの曲輪を設け、東側の下段に帯曲輪が巡らされている。帯曲輪が最上領に面した東側のみに設けられていることから、中山城を防備するのと、中山城から岩部山城（第3図21）に連絡し、置駒一円を防備するため、境目の物見台として重視されていたと考えられる。このように中山城と上ノ山館・物見山城は三位一体の関係にあり、米沢街道沿いに南下してくる最上勢を断固立ちちはだから境目の城になっていたと想定される。

中山城と米沢街道上において対峙した最上方の城館が、高橋城（第3図5）である。高橋城は白鷹山系の東麓に突出した標高356.3mの虚空蔵山に構築された山城で、山頂から上山盆地を一望できる要害の地に主郭を築いている。主郭は東西56m、南北36mの瓢箪形に整形した平坦面であり、物見台的な役割をなしていたと考えられる。その下段には曲輪を幾重にも配し、空堀も構築されてお

り、かなり堅固な山城であった。

中山地区は中世において、「北条莊」に含まれる地域であった。しかし「中山」が文献に名を現るのは16世紀以降であり、それ以前の確かな史料は見出せない。元中山の天台宗成就院が鎌倉時代の建長年間（1249～56年）の開山、中山の浄土宗西福寺が一向後聖によって弘安3年（1280年）に開かれたと伝えられていることから、鎌倉時代には中山盆地内に聚落が成立していたと考えられる。

中山城が重要な役割を果たす城として登場するのは16世紀半ば過ぎで、伊達氏と最上氏がそれぞれ領地拡大の動きを見せた時期に相当し、伊達輝宗・政宗と最上義光が領主となり、奥羽の戦国時代が激動する時期からである。天正16年（1588年）伊達政宗が大崎（現宮城県）に攻撃を仕掛けた時、大崎の援護にまわった最上義光はこれを牽制し、政宗と対立した。この時に中山が抗争の中心舞台となった。この抗争は同年の3月に始まり、7月に和睦が成立し終息したが、その後伊達政宗は中山の支配管理の任務を小国蔵人盛後に与え、領界警護を強化した。しかし天正19年（1591年）政宗は岩出山に転封となり、会津には蒲生氏郷が転封され、米沢には蒲生郷安、中山には同じく郷可が入り、中山は蒲生領となつた。

蒲生氏は置駕領内に米沢城・中山城・小国城の三城を置いたが、中山城は置駕北部の政治・軍事の重要な拠点に位置付けられた。蒲生氏は近畿を主な活動の場としてきたが、中山城はこれまで例を見ない石垣を伴う山城であることから、蒲生領の時代に新たな手法で築城されたと考えられる。蒲生氏郷は文禄4年（1595年）に死去し、その跡を秀行が継いだが、慶長3年（1598年）1月に宇都宮に移封となり、代わって上杉景勝が越後から入部した。蒲生時代は二代8年であったが、この期間は領主相互の争いではなく、平穏の内に経過した時代であった。

会津120万石に移封となった上杉景勝は、直ちに領内の支配体制の強化に努めたが、蒲生時代には三つの城だったのが、上杉支配下になると七城となつた。米沢城・高畠城・金山城・中山城・荒砥城・鯨貝城・小国城で、この内最もに対する軍事交通の要所にあるのが、金山城（吉野川沿い小滝幹筋の起点）、中山城（上杉領最北端で最上領山城と対峙）、荒砥城（最上川右岸・白鷹丘陵を越える山道の起点）、鯨貝城（最上川左岸・五百川西街道の起点）の四城であった。中山城には、横田式部少輔

貞俊が城主として領界の警護にあたつた。

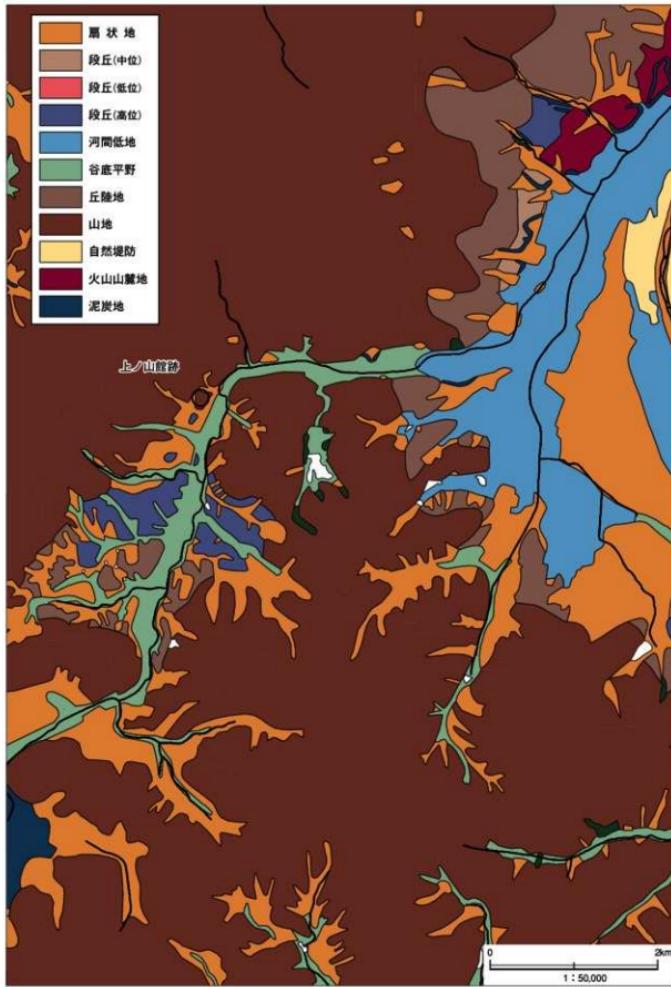
中山城に係わる最大の戦いは、慶長5年（1600年）秋の「関ヶ原合戦」に連動した越後と上杉の戦いである。同年5月徳川家康は上杉討伐を声明し、6月には諸大名に対し会津攻めの分担を定めた。上杉側はこれに備えて警備を更に厳重にしたと推測され、中山城もこの時点で一段と防衛力を固めたと見られる。同年7～8月にかけて上杉討伐に動き出した徳川家康に呼応して、東北地方では秋田実季、戸沢政盛、南部利直等が最上領に集結した。伊達政宗も徳川方として7月24日に白石城を攻め落とした。ところが近畿地方で石田三成方の軍勢が大津・伏見を攻撃し、徳川方の防衛軍が敗れると、家康は7月25日に上杉攻めの中止を決定し、小山から江戸に戻ってしまう。伊達政宗もこの段階で上杉攻撃を中止し、山形に集結した東北の諸大名も自分の領地に帰ってしまう。こうして徳川主力軍による南方からの上杉攻撃計画は潰れ、北方からの奥羽諸大名連合軍による攻撃もなくなり、8月時点での上杉に対抗しようとしたのは最上ののみとなつた。

同年9月3日上杉方では米沢で軍議を開いて最上攻撃を決定し、大将は米沢城主直江兼続で、山形を西、南、北の三方から攻略することを計画した。主力軍は荒砥城に集結し、煙谷城を攻め落とし、その勢いをもって長谷堂城に進攻した。長谷堂城の攻防戦はなかなか決着がつかず、その間伊達政宗からの援軍もあって、戦いは膠着した。こうして9月末に関ヶ原合戦の結果が到着し、上杉軍が撤退し、最上軍の追撃となり、10月1日に長谷堂方面の戦いは終結した。

中山城は上杉領北端の拠点で、上杉勢はここから最上領の高麗城攻略に出動した。9月16日に直江兼続からの指令を受けて、中山城に大軍が集結し、翌17日4,000の上杉軍が出陣した。上山攻撃軍の先陣は大将木村造酒丞親盛（長井郡代・与板衆・上杉景勝の旗本）で、中山城から現在の前川ダムの山間を経て赤坂に向かったが、赤坂上の台に到着した時、待ち受けていた最上軍と乱戦となり、大将木村は戦死を遂げた。後陣の大将は横田式部貞俊（中山城主）と清水三河守康徳（信州出身の武将・中山に土着居住）で、掛入石から川口に出て火を付け、石曾根・高松・長清水と進出し、諸方の村を焼き払った。しかし上山勢の抵抗は凄まじく、清水三河守は



I 調査の概要



第4図 上ノ山館跡周辺地形分類図（山形県1983）改変

20騎の部下に守られ退却、川口と掛入石の間まで引いた所でまた上山勢に襲われ、部下が防戦している間に中山城に逃げ入った。横田皆俊は高松まで進んでいたが、後ろを取り巻かれ苦戦に陥り、ようやく切り抜けて川口と中山の境「柳屋」まで退いた所で、また上山勢に襲われ、部下が防戦している間に、山伝いに中山城に帰り着いた。勝ちにに乗じた最上勢は中山城を取り囲み、鉄砲を放って攻め立てたが、城際まで攻めることができず、夜になると引き返してしまったという。この日以降の中山城を巡る情勢は判然としないが、上杉軍は城に籠もり、最上軍は自領を警備するだけで、中山城攻撃には出でなかたと考えられる。

以上のように、関ヶ原での戦いは慶長5年（1600年）9月15日に結末が明らかとなり、中山の戦いは9月17日にはぼ落着し、長谷堂では10月1日に上杉軍の撤退と激しい追撃戦で終わつた。出羽全体ではその後も小競り合いが続いたが、次第に軍事行動は終息に向かって行き、翌慶長6年（1601年）春には酒田に残存する上杉軍が最上義光の軍門に下って、8ヶ月に及んだ出羽合戦はようやく終局を迎えた。

酒田城（亀ヶ崎城）の攻防戦と時を同じくして、中山・川口の境界付近では再び最上対上杉の局地的戦闘があった。慶長6年（1601年）3月24日、領境の見張り番の足軽と最上領の足軽が争いを始めた。上杉方は川口まで押し出して、双方鐵砲の撃ち合いとなつた。当初中山城主横田皆俊は家臣を派遣して早急に引き取らせようとしたが、最上方は次第に大勢となり、上山城主の子息里見権兵衛も出陣し、これを見て横田皆俊も鉄砲隊を引き連れて出撃し、上山勢を追い散らしたという。しかし本格的な戦いまでは発展しなかつた。中山は領境だけに、その後も土地や山林の権益を巡って、小さな争いは避けられなかつた。中山城はそれを抑えるためにも、大きな役割を果たしたと考えられる。

上杉景勝は慶長6年（1601年）8月、関ヶ原合戦で西軍に加担した廉^シで、米沢30万石に減封されて米沢藩が成立した。それ以降幕藩体制が安定すると、中山城は戦略的・軍事的意味を薄めて、領内北部の行政・警察の役割を担うことになった。米沢藩成立時には、会津時代と変わりなく領内に重臣を分封し城代に任せ、領内を支配すると共に、外敵を防衛していた。置賜郡には高畠城・掛

入石中山城・荒砥城・小国城の五支城があり、掛入石中山城は慶長3年（1598）以来横田皆俊が寛永8年（1631年）まで城代を務めていた。元和元年（1615年）一国一城令により殆どの城が破却されることになるが、城構えはそのままだらしく、城代以下諸士の駐屯は変わらず藩境の警備に当たつていた。元禄5年（1692年）2月、米沢藩財政の窮乏などもあり支城体制を改め、「中山城」は「中山御役屋」と改称され、「城代」も「役屋持」と呼ばれるようになった。中山御役屋には、上級武士の御役屋1名、中级武士で副将格の「御附馬上」2名がおり、その下で実務に携わる扶助方^{おほなげ}・手明^{てあき}・足軽などの下級武士40名程がいたとされている。旧中山小学校の校舎跡地に御役屋が設置されていたといふ。

中山御番所は藩境に設けられた番所で、上ノ山館跡直下の現在の渡辺氏宅の場所に設けられていた。既に慶長3年（1598年）に上杉領となる中山に開所を設け、領境の警備と通行人を監視していたが、同6年（1601年）に見張り番の足軽と最上領の足軽の小競り合いがあつたことは前記した。開所には厳重な門構えがあり、その左右に櫓が張られており、昼間は番所役人が一人、夜は足軽が番をしたといわれている。

3 調査の経緯と概要

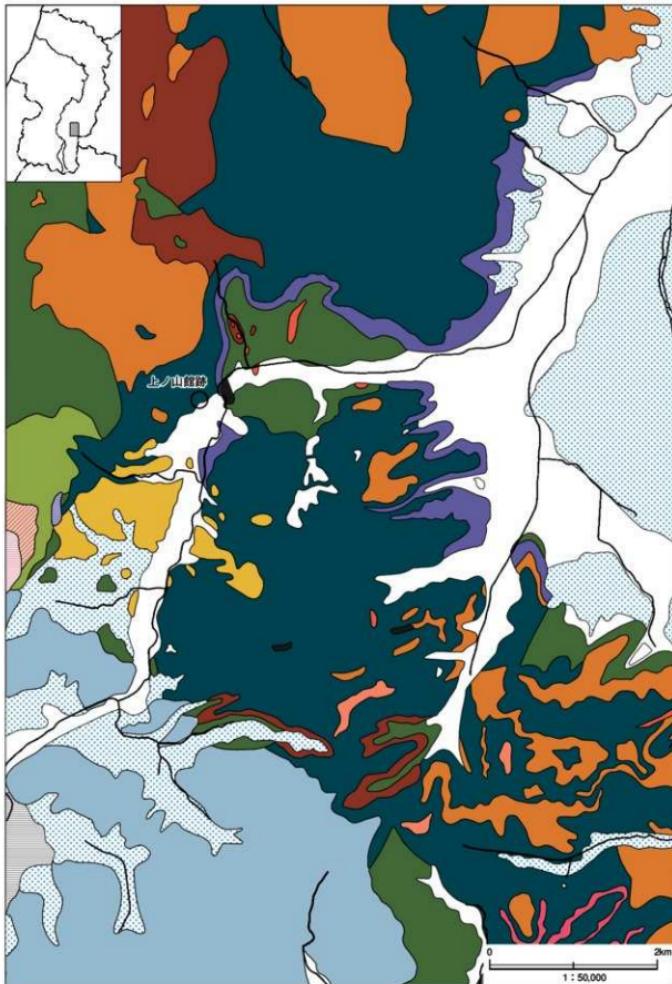
A 調査区の配置（第1図）

上ノ山館跡は白鷹山系片倉山の山麓が北から南に突き出た半島状の丘陵の全城が遺跡の範囲となる。前回発掘調査の対象になつたのは、その内の南東部分に相当する（第1図）。面積では10,000m²が調査対象となつたが、この区域は地すべりの頻発地帯であり、調査区中央東側には地割れが認められ、地すべりの危険が予見された。そこで関係機関と協議した結果、この区域は発掘調査の対象から除外し、現況の地形を測量することで対応することで了承が得られた。また調査区の中央西側には嘗て階段状の帶曲輪が存していたと言われるが、1970年頃に果樹園（ブドウ園）造成のため地表面が掘削されていた。そこでこの区域も、調査対象から除外することにした。

前回の発掘調査の対象となつたのは、中央部の未調査区域を挟んだ北側と南側に当たる。北側は「北調査区」、南側は「南調査区」と呼称した。



I 調査の概要



第5図 上ノ山館跡周辺表層地質図（山形県1983）改変





I 調査の概要



第6図 表層地質図凡例



I 調査の概要

「北調査区」は、遺跡の北東側に相当する。調査面積は4,800m²で、幅の狭い帯曲輪が幾重にも巡らされており、米沢街道を見下ろすには好適な場所となっている。調査区の中央部分は地すべりの痕跡と思われるU字形の抉りとなっており、段々の畑に整地されているが、流出した土砂は山裾に張り出しますように観察される。調査区の現況は殆どが杉林であったが、調査区南西の平坦部は嘗て黄金神社があった場所で、道路工事に先行して丘陵頂部に移設され、発掘調査を経ないまま丘陵頂部（第2次調査範囲）は削平されてしまった。調査区は中央の地すべり部分を挟んで「北調査区北曲輪」と「北調査区南曲輪」に区分され、嘗て黄金神社があった平坦部は「北調査区最上段」と呼称した。

「南調査区」は、遺跡の南端に相当する。調査面積は3,000m²で、丘陵の末端で中山城跡を臨む場所に当たり、東流する横川で中山城跡と画される。幅の狭い帯曲輪が幾重にも巡らされるが、地すべりが随所に見られ、崩れた土を整形して段々の畑にした部分もあり、原形を留めていないとの教示を旧地権者から得た。また用地買取後も畠地として使用されていたため、収穫を待って地形測量を実施した。土層観察と遺構確認のためのレンチの開設も検討したが、これまで何度も地すべりが起きており、地元住民の不安を煽りかねない点と、表土を除去することで土砂流出や鉄砲水を誘発する可能性も予見されたことから、現況の測量のみに留め、本調査区の調査を終了した。

第2次調査では、北調査区の西側2,100m²の範囲の測量調査を実施した。半島状に突き出た丘陵の稜線から西側斜面にかけた区域が対象となった。当初工事の範囲からは除外されていたが、工事の進捗に伴い地滑り防止工事の必要が新たに生じたため、用地買収が実施され、国土交通省より追加の調査を要請された。中山城跡を望む区域で、帯曲輪状の土地改変が観察されたが、民家が近接し発掘調査時の土砂流出等の危険が予見されたことから、県教育委員会と国土交通省との協議の結果、現況の測量のみを実施することとなった。

B グリッドの設定（第8図）

上ノ山館跡の第1次調査では、座標が事業対象区域だけではなく、将来史跡整備が予定されている中山城も網

羅する必要があり、公共座標（世界測地系）に基づく大グリッド制を採用したが、今回の第2次調査でもこのグリッドを踏襲した（第10図）。

上ノ山館跡と中山城の全城が網羅できるよう公共座標（世界測地系）を基準として、50m×50mの方眼の大グリッドを設定した。中山城跡の主郭を西端として西から東に向かってアルファベット、上ノ山館跡の北側を北端として北から南に向かってアラビア数字を付与し、大グリッドをアルファベット・数字の順で「H 2」を表記した。更に大グリッド内を5 m方眼の小グリッドに分割し、西から東に00・01・02 … の一位、北から南に00・10・20 … の十の位とした。従って各々の小グリッドは、大グリッド名を頭に冠して「H 2-22」と表記した。50 m四方の大グリッドは、5 m四方の小グリッド100個で構成されることになる。

C 調査の経過

今回の調査は、現地調査を平成19（2007）年9月18日（火）から同年10月19日（金）までの期間で実施した。今回の調査は測量調査が主であるため、先ず現地の伐木・草刈り等の清掃作業を実施し、測量の準備を進めた。その後ラジコンヘリを用いた空中写真測量、更にデジタルカメラを用いた現地での補足測量を実施し、伐採した木材等の搬出を終り、現地調査は終了した。現地での調査工程は以下の通りである。

平成19（2007）年9月18～20日

伐木・草刈り作業実施（有限会社ドリーム・アート業務委託）

平成19（2007）年9月26日

空中写真測量実施（株式会社ワクニ業務委託）

平成19（2007）年10月5～6日

写真測量補足（株式会社ワクニ業務委託）

平成19（2007）年10月15～19日

伐木等搬出処理（有限会社ドリーム・アート委託業務）

II 調査の成果

第2次調査の対象となったのは、上山市大字中山字上ノ山に位置する。北から南に突き出た半島状の丘陵の稜線から西側の斜面にかけた区域で、稜線を挟んで第1次調査の「北調査区」の反対の斜面に相当する（第7図）。また北側に沢に面した急峻な斜面についても、測量調査を実施した。

調査対象区域は、移設された黄金神社を頂点として四方が傾斜しており、北側が比較的緩やかに傾斜するのに対し、沢に面する東側は極めて急峻で、米沢街道に面する南東側斜面と中山城跡を望む南西側斜面に帶曲輪が構築されている。前回南東斜面を調査しており、今回は南西斜面の測量調査を実施した。

黄金神社から南東斜面にかけた区域は、国道13号や奥羽本線を見下ろせる眺望がひらけた場所に相当する。米沢街道を南下する最上勢を防備するには好適の場所となっており、黄金神社のある最上段は標高295.5mを測る。黄金神社付近は平坦地となっていることから、主郭であったと想定されるが、事前の調査を経ることなく削平されたため、土壘の存在は確認できていない。また北側の緩やかな斜面は畠地となっており、後世の改変が加えられたことが想定される。

南西斜面の帶曲輪は、10～12段で構成される。縦幅2～3m、横幅20～25m程度の階段状の地形が並列してお

り、最下段と最上段の高低差は13.5mを測る。米沢街道の裏側に当たり、街道を南下する最上勢を防備するには不適切な場所となるが、中山城直下が主戦場になることを想定して構築されたのであろう。またその北側にも、縦幅のある階段状の地形が造成されているが、現況は畠地で、北西斜面に隣接することから、後世に改変が加えられたものと想定される。

黄金神社の北東斜面は沢に面して急峻であるが、所々に階段状の地形が形成されている。白鷹山系からの沢水を利用するのには適しているが、階段状の地形に規則性はなく、米沢街道や中山城からは隠れた斜面となり、防備のために造成されたものかどうかは判然としない。

今回調査した南西斜面の帶曲輪は、前回調査した南東斜面の帶曲輪と一緒にものであったことが想定される。南方に張り出した稜線は現在緩やかな斜面となっているが、かつては階段状に形成されていたと想定され、この丘陵全体が中山城を防備するための施設になっていたと考えられる。前回の調査で出土した遺物は、近世以降がほとんどで、中山城跡との関連をうかがわせる資料は認められなかったが、今回の調査も測量調査のみであったため、出土遺物は得られておらず、遺跡の性格を明確にすることはできなかった。

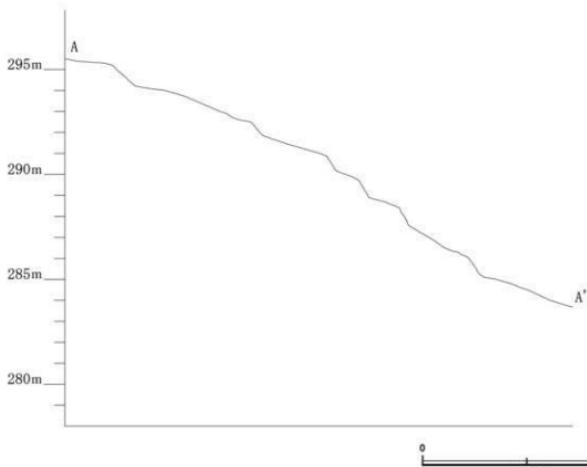




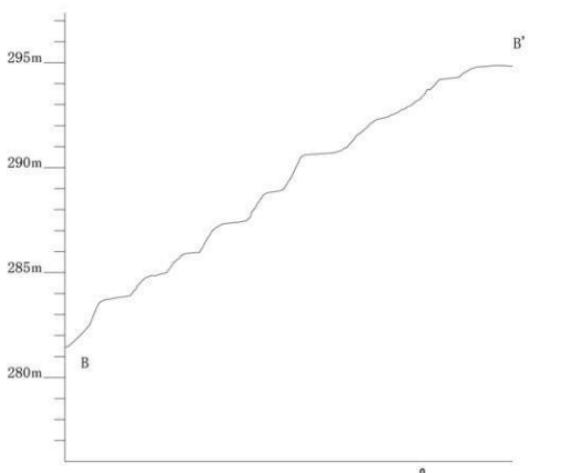




II 調査の成果



第8図 A-A' ライン断面図



第9図 B-B' ライン断面図









II 調査の成果



第11図 上ノ山館跡縄張り図



III 調査の総括

上ノ山館跡は、中近世の城跡として1995年に登録され、一般国道13号上山バイパス改築事業にかかる発掘調査として、2005年に第1次調査が実施されたが、今回の第2次調査は2007年9月18日～10月19日までの期間で、隣接区域の追加調査として測量調査のみを実施された。

上ノ山館跡は自然の丘陵を利用して構築された館跡で、調査範囲は前回と合わせると12,100m²に及ぶが、今回の第2次調査でも北から南に突き出た半島状の丘陵全体に、階段状の帯曲輪が巡らされていたことが確認できた。地滑り等の危険が予見されたため、測量調査のみに留まり、曲輪に伴うと考えられる遺構は検出できなかつたが、前回の測量図に今回の成果を追加できたことで、詳細な図面を作成し、提示することができた。

上ノ山館跡の性格として、置賜と最上の境目にあって北からの攻撃から中山城を防衛するための前線基地としての役割が考えられる。丘陵全体に帯曲輪が巡らされており、北調査区は掛入石方面からの侵入に備えた施設、南調査区は前森山との間から中山城本体に攻め込む勢力

に対する防御の施設であったと考えられる。また今回調査した半島状の丘陵の付け根の北西斜面にも帶曲輪が構築されており、中山城直下が主戦場になることを想定して構築されたことが窺える。しかし両次の調査では、曲輪に伴うと思われる遺構が検出されなかつたことから、階段状の改変は地すべりを防ぐための土留めの役割を果たしていたとも考えられる。該域は地すべり地帯で、斜面の下方に暮らす住民にとっては、地すべりに対して何らかの対策が求められたであろう。丘陵一帯に階段状の整地がなされたのは、軍事上の要請だけでなく、近代においては防災対策も兼ねていた可能性が考えられる。以上のように、中山城跡と上ノ山館跡、それに東方の物見山跡は三位一体の関係にあり、米沢街道を南下してくる最上勢に断固立ちはだかる境目の城となっていたと考えられる。

最後に、調査に際し御指導・御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係各位に、深甚なる謝意を表します。

参考文献

- 阿子島功・米地文夫ほか 1983 「II 地形分類[山地分類]基本調査 赤湯・上山」15-34頁 山形県
- 伊藤清郎ほか 2003 「中世の城跡 中山城跡 中山城跡調査報告書」上山市教育委員会
- 生出慶司・中川久夫・蟹沢聰史編 1989 「日本の地質2 東北地方」日本地質「東北地方」編集委員会編 共立出版
- 大泉壽太郎・高柳健一 2005 「上山城跡発掘調査報告書」上山市教育文化財調査報告書第5号 上山市教育委員会
- 辻誠一郎 2008 「山形地域の過去3万年前の環境変動」「押出道路と越後前駒の山形県原聚楽」56-68頁 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 中山知子・宮城豊彦 1984 「閉鎖系堆植物からみた候級水期中生以降の環境変化と斜面発達過程-山形県川棚低地-」『東北地誌』第36巻第1号 25-38頁 東北地理学会
- 守田益宗・日比野祐一郎 1994 「『Ⅲ自然の移り変わり』2 古气候と植生の移り変わり」「仙台市史 寮別編1自然」278-345頁 仙台市史編纂さん・委員会編集
- 山形県教育委員会 1996 「山形県中世城跡遺跡調査報告書 第2集(村山地区)」
- 山形県教育委員会 2006 「分布調査報告書(32)」山形県埋蔵文化財調査報告書第206号
- 山形県埋蔵文化財センター 2007 「上ノ山館跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第157集
- 山形県 1983 「土地分類基本調査 赤湯・上山」



写真図版





調査区及び周辺の航空写真





調査区全景（南から）



調査区全景（東から）







調査区全景（北から）



調査区全景（西から）







報告書抄録

ふりがな 書名	うえのやまたてあとだいにじはくつちょうさほうこくしょ 上ノ山館跡第2次発掘調査報告書						
翻書名							
卷次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第175集						
編著者名	小林圭一						
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
発行年月日	2009年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村、遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
うえのやまたてあと 上ノ山館跡	山形県 上山市 大字中山 字上ノ山	6207 207-002	38° 7' 37"	140° 13' 2"	20070918 20071019	2,100	一般国道13号 上山バイパス 改築事業
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
要塞	戦国	曲輪				中山城に面する西側斜面に帯状の曲輪を多数検出した。	
要約	置賜と最上の境目にあって、北からの攻撃から中山城を防備するための軍事施設であったと考えられる。						







山形県埋蔵文化財センター調査報告書第175集

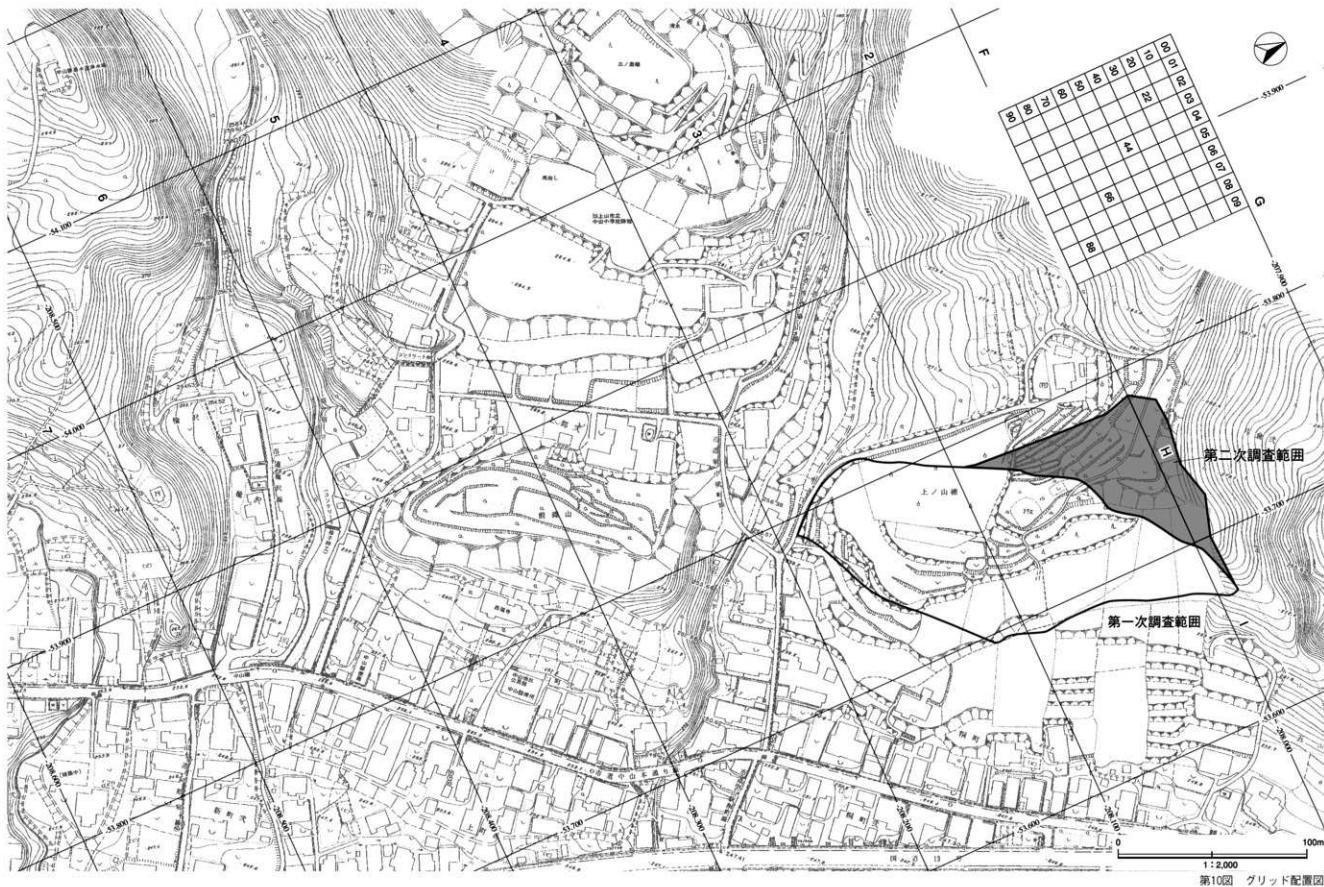
上ノ山館跡第2次発掘調査報告書

2009年3月31日発行

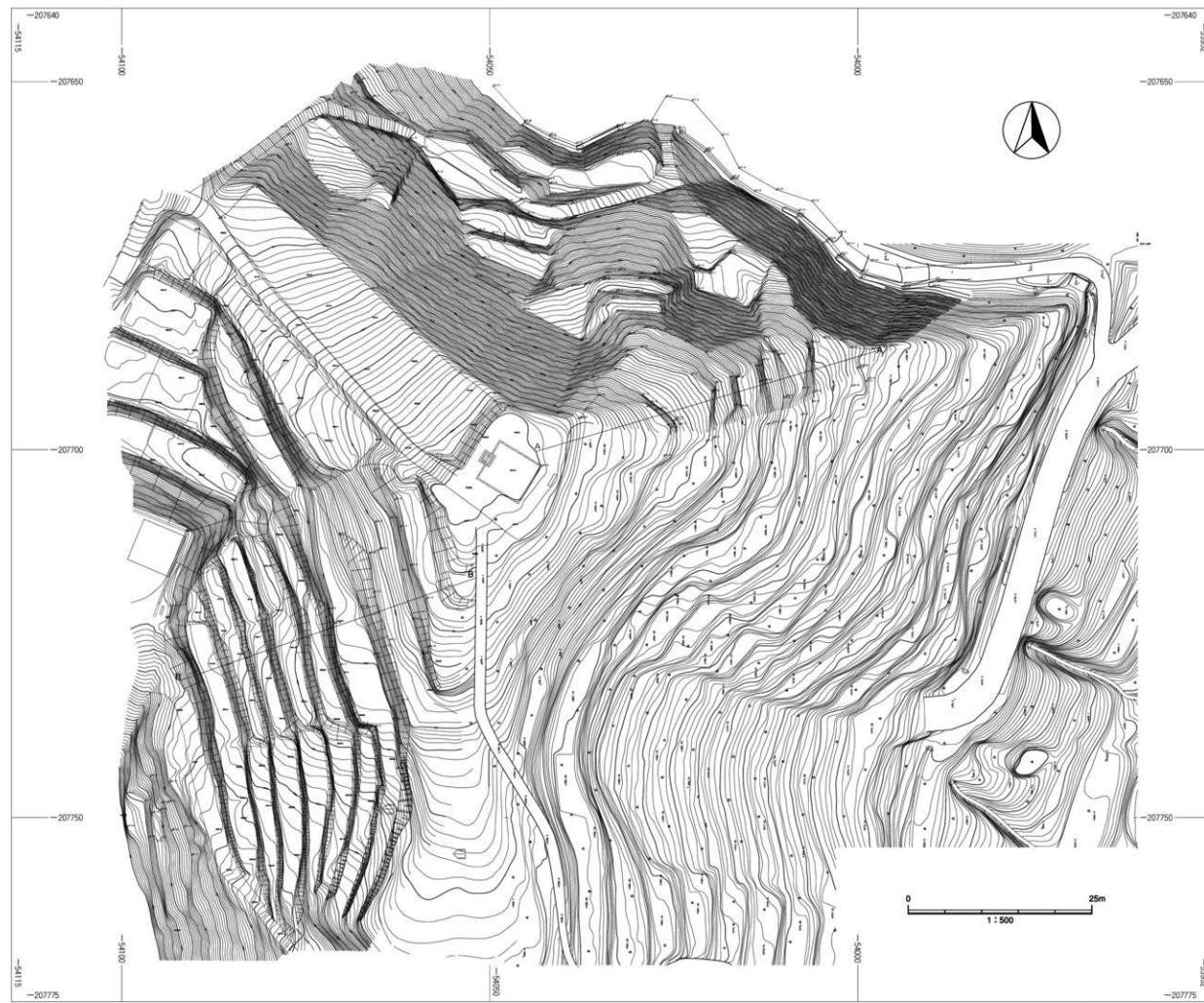
発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 山形印刷株式会社
〒990-2323 山形県山形市桜田東三丁目7番31号
電話 023-622-6291







第10図 グリッド配置図



第7図 上ノ山崩跡現況図